新しいライフステージに立つ
団塊の世代の女性たち

——団塊の世代の女性・生活意識調査——

昭和58年11月

ポーラ文化研究所

1. 調査の趣旨

現在、団塊の世代は30代の半ばに達した。

ご承知の通り、この世代は社会の一大勢力として常に注目を浴び続け、その動向については、常に大きな関心が持たれてきた。

その団塊の世代の女性たち、彼女たちもご多分に漏れず、ここ何年かの間、出産に続く子育てのため家庭に縛り付けられてきた。しかし、今、彼女たちは子育てから解き放たれつつあり、家庭から再び社会に進出するチャンスを得つつある。

新しいライフステージに立とうとする彼女たちが何を考え、何をしようとしているのか。

それを探るためにこの調査を行った。

2. 調査の概要

調 査 地 域 ……東京及びその郊外

調 査 対 象 ……団塊の世代を中心とした年令層の女性を主な対象として、522名。

有効回答数497（95.2％）

調 査 時 期 ……昭和58年7月

調 査 方 法 ……アンケート方式

回答者の属性（年令別にみた学歴、職業、家族）

（％）

年齢	N	学歴				職歴									家族			
		中学	高校	短大	大学	無職	専業主婦	学生	有職（フルタイム）	有職（パート）	内職	自営	自由業	その他	独身（同居）	独身（別居）	既婚（子なし）	既婚（子あり）
全体	497	3.4	52.7	21.1	21.3	2.2	42.9	2.8	26.6	7.8	5.8	3.2	2.2	4.6	15.3	4.4	7.2	71.0
～22才	40	0.0	47.5	35.0	17.5	0.0	0.0	32.5	47.5	2.5	0.0	0.0	0.0	12.5	82.5	10.0	7.5	0.0
23～27	72	0.0	44.4	27.8	26.4	0.0	20.8	1.4	62.5	5.6	0.0	2.8	0.0	6.9	40.3	11.1	25.0	23.6
28～32	133	0.8	50.4	19.5	27.8	0.8	57.9	0.0	23.3	7.5	3.8	3.0	3.0	0.8	4.5	4.5	7.5	80.5
33～37	155	3.2	54.2	21.9	18.7	3.9	54.8	0.0	15.5	6.5	7.7	3.9	3.9	2.6	3.2	1.3	3.2	91.6
38～42	60	6.7	58.3	15.0	18.3	1.7	43.3	0.0	13.3	16.7	13.3	1.7	1.7	3.3	5.0	1.7	0.0	88.3
43～47	18	22.2	66.7	5.6	5.6	5.6	11.1	0.0	22.2	16.7	11.1	5.6	0.0	22.2	0.0	0.0	0.0	94.4
48～	18	16.7	66.7	5.6	11.1	11.1	38.9	0.0	5.6	5.6	11.1	11.1	0.0	11.1	0.0	5.6	0.0	88.9

注）独身の（同居）、（別居）は、（親との同居）または（親との別居）の意。

≪結果の要約≫

1. 女に生れて、今が一番幸せな時

全体としては、過半数の女性が「女に生れたことを幸せ」と考えているが、たとえば、子供のある既婚者は、子供ができてからの今の自分の幸せ度が一番高いというように、「現在、自分が置かれている立場」が幸せな状況であるとする現状肯定の傾向が強い。

2. 現実を前に変るタテマエ。仕事と子育て両立の難しさ

「仕事か子育てか」。まだ子供のいない若い妻たちは子供ができたら仕事より子育てを選ぶだろうと想定し、独身者（親と別居）は仕事と子育てを両立させようという意欲が強い。タテマエ（両立）が現実によって変化（子育て選択）することを物語っている。しかし、傾向として、団塊の世代以降の若い年令層では仕事と子育て両立の意欲が強い。

3. 女性の酒とタバコに理解があるのは、団塊の世代以降

女性の酒とタバコに対しての容認度では、団塊の世代以降とそれより年長の世代で明白な差がある。そういう点で団塊の世代は新世代のライフスタイルを持っているといえる。

4. 年と共に〝夫離れ〟する妻たち

若い女性は夫が常に身近かにいて欲しいと思っているが、年令が上るにつれて「夫は仕事に生きて欲しい」とか「子供の教育のためなら単身赴任もやむをえない」という考えが強くなり、いわゆる「夫離れ」して行く。

5. 〝家族中心の生きがい〟から〝自己中心の生きがい〟へ

現在の生きがいは「家族中心」、将来の生きがいは「自己中心」に。
これが専業主婦一般の生きがいの構造変化である。

6. 人並み程度に出世して、平穏な家庭生活を送る——夫の将来像

全体的には「夫は人並み程度に出世して、将来、平凡で平穏な家庭生活を送るだろう」と考える女性が過半数を占める。年令が高くなるにつれ、「夫は出世とは無縁」という意見が急速に強まる。こうした中で、団塊の世代の女性たちは、他の年令階層より、「夫は人並み以上に出世。夫は将来仕事に生きがいを見出す」とする人の割合が多い。この年代の夫たちは、今、働きざかりだからであろう。

7. 高学歴女性の夫ほど妻側の親の老後をみる

高学歴女性ほど、自分の親の面倒を自分の夫が見るとする人が多い。

8. 年上世代より年下世代の方が話が通じにくい

一般に自分より年上の世代には話が通じるが、年下の世代には話が通じにくいと考えている。

9. 礼儀、しつけ、辛抱強さでは年下世代はダメ世代

どの年代も、「目上への礼儀」、「子供のしつけ」、「辛抱強さ」について、年下世代はダメ世代であり、年上世代にはやっぱりかなわないと考えている。

女に生れて、今が一番幸せな時

≪結婚前≫、≪結婚後≫、≪子供をもってから≫の各ステージ毎に、女に生れたことを幸せに思うかどうかを聞いた結果（図１－１）、どのステージでも「そのとおり」と肯定する人が過半数を占めた。

（注）質問は、未既婚、子供の有無に拘らず、総ての人に質問したものであり、

- 「既婚者、子供あり」の人は、現在をどう思うか、結婚前及び子供を持つ前（結婚後）はどうであったかを答えたもの。
- 「既婚者、子供なし」の人は、≪子供をもってから≫については、子供を持った場合を想定して答えたもの。
- 「独身」の人は、結婚したり、子供を持った場合を想定して答えたもの。

となる。以下、文中または表中に≪結婚前≫、≪結婚後≫、≪子供をもってから≫と記した場合は、これと同様の内容を示す。

次に、この結果を未既婚別、子供の有無別に見たのが（図１－２）であるが、これによると、

既　婚（子供あり）

≪結婚前≫→≪結婚後≫→≪子供をもってから≫と、ステージが進むに従って幸せ度が高くなり、結局、女として生れたことの幸せを、現在、一番感じていることになる。

既　婚（子供なし）

≪結婚前≫より≪結婚後≫の幸せ度が高いが、≪子供をもってから≫は幸せ度が減っている。これらの人は全体として若妻が多いのだが、子供のある既婚者と同様、今の自分の幸せ度が一生のうち最高であると思っている。

独　身（別居、同居）

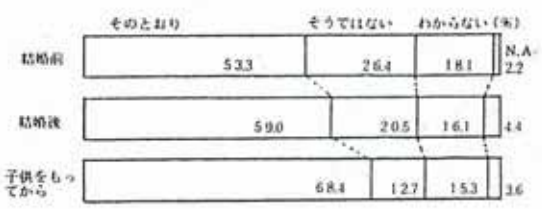
≪結婚前≫の現在よりも、≪結婚後≫の方が幸せ度は下がると想定している。しかし、≪子供をもってから≫は幸せ度が再び上ると考えている。

等が特記できる。

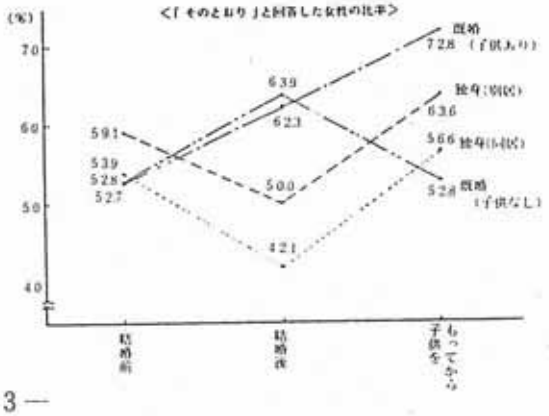
以上、全体的には過半数の女性が「女に生れたことを幸せだ」と考えているが、ライフステージとの関係では「現在の自分が一番幸せ」という現状肯定傾向が顕著に現われている。

女に生まれたことを幸せだと思う。

（図１－１）〔全　体〕



（図１－２）〔未既婚、子供の有無別〕



現実を前に変るタテマエ。仕事と子育て両立の難しさ

「仕事か、子育てか」。それは多くの女性が一度は悩む問題といってよいであろう。
そうした経験を経て、あるいは近い将来そういう経験をするであろう立場から、「仕事と子育てを両立させた方がよい」とする人の割合は（図２－１）の通りであり、その中で、

既　婚（子供なし）

まだ子供のいない若い妻たちは、子供ができても仕事を続けようという意欲が希薄と考えられる。間もなくやってくるであろう現実を目の前にすると「仕事」より「子育て」を選択する意向が強く出るといえよう。

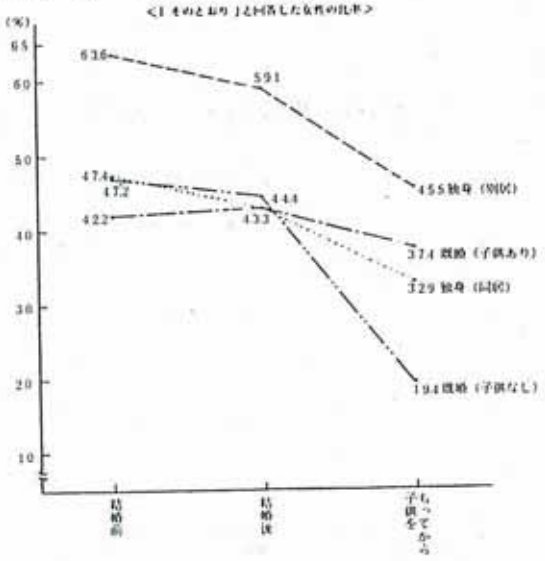
独　身（別　居）

親と別居している独身女性は、１人立ちしているということから、自立心が強いと考えられる。その意味で現時点では、仕事と子育てを両立させた方がよいとする人の割合が他より多い。ただ上記の通り、結婚して、子育てが目前に迫った場合も、その意見を持ち続けるかどうか、それは何ともいえないだろう。

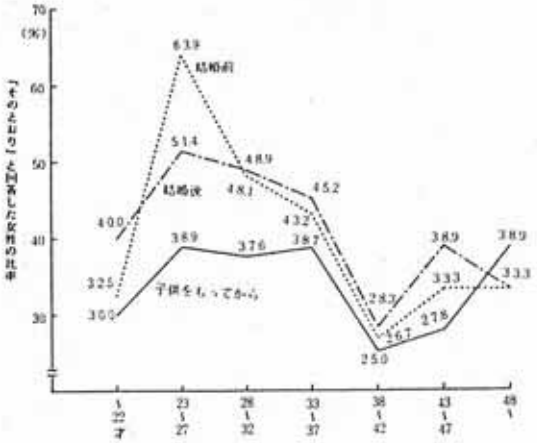
といった点が特徴的である。それは、つまり、女性たちが現在置かれた立場立場で現実的対応をしているのであって、それほどに仕事と子育ての両立が、タテマエで律し切れない難しさを持っていると思えるのである。
一方、年令階層別にこれを見たのが（図２－２）で、団塊の世代（33～37才）以降の若い人たちのほうが、子供が生れても仕事を持ち続けることへの肯定度が高い。そろそろ子離れの時期にさしかかりつつある団塊の世代が、今後も、このような考えを持ち続け、それをどの程度実行に移すのか。注目されるところである。

結婚して子供が生まれても、できるだけ職業を持ち続けたほうがよい。

（図２－１）〔未既婚、子供の有無別〕



（図２－２）〔年令階層別〕



女性の酒とタバコに理解があるのは、団塊の世代以降

女性の酒やタバコにめくじらを立てるような時代ではないが、それでも全体的には「女性が酒やタバコを飲むのは、あまりよくないことだ」と考えている人が多数派である(図３－１)。これを未既婚別等に見ると、（図３－２）の通りであり、独身（別居）の女性は他と全く異った考えを示す。つまり、この質問に対しての肯定率が非常に低く、女性の酒とタバコに対しての抵抗が小さい。これは、自分がタバコや酒をたしなむということもあろうが、一緒に付き合う同性に対する評価（多分、同じように親と別居している独身女性同志）からくるのではないかと思われる。いずれにせよ、女性は親や家庭を離れると、旧来の社会的束縛から解放された意識を持つといえる。これは、酒、タバコに限らず、性解放についても同じ傾向があるものと思われる。

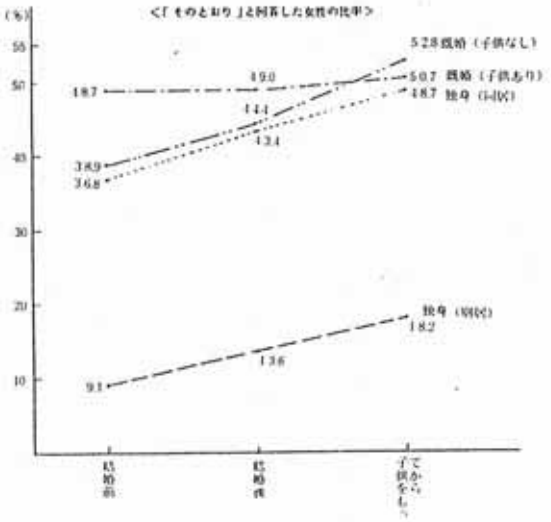
年令階層別に見たのが（図３－３）であるが、団塊の世代（33～37才）以降とそれより年長の世代の女性では、女性の酒とタバコについての評価に格段の開きがある。その意味で、団塊の世代の女性は新しい世代に属し、新しい世代のライフスタイルを持つといえる。

「女性が酒やタバコを飲むのは、あまりよくないことだ」

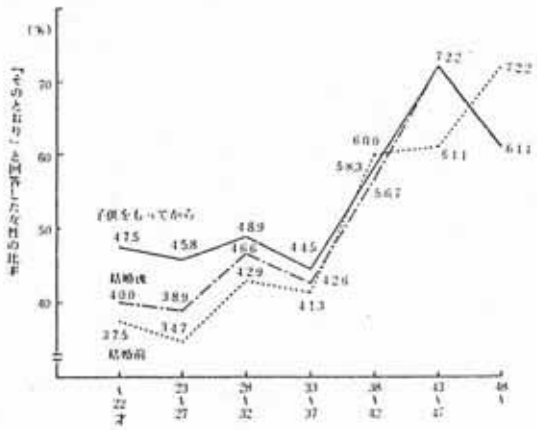
（図３－１）〔全　体〕

	そのとおり	そうではない	わからない(%)
結婚前	44.5	38.0	17.5
結婚後	46.3	36.2	17.5
子供をもってから	49.3	33.8	16.9

（図３－２）〔未既婚、子供の有無別〕



（図３－３）〔年令階層別〕



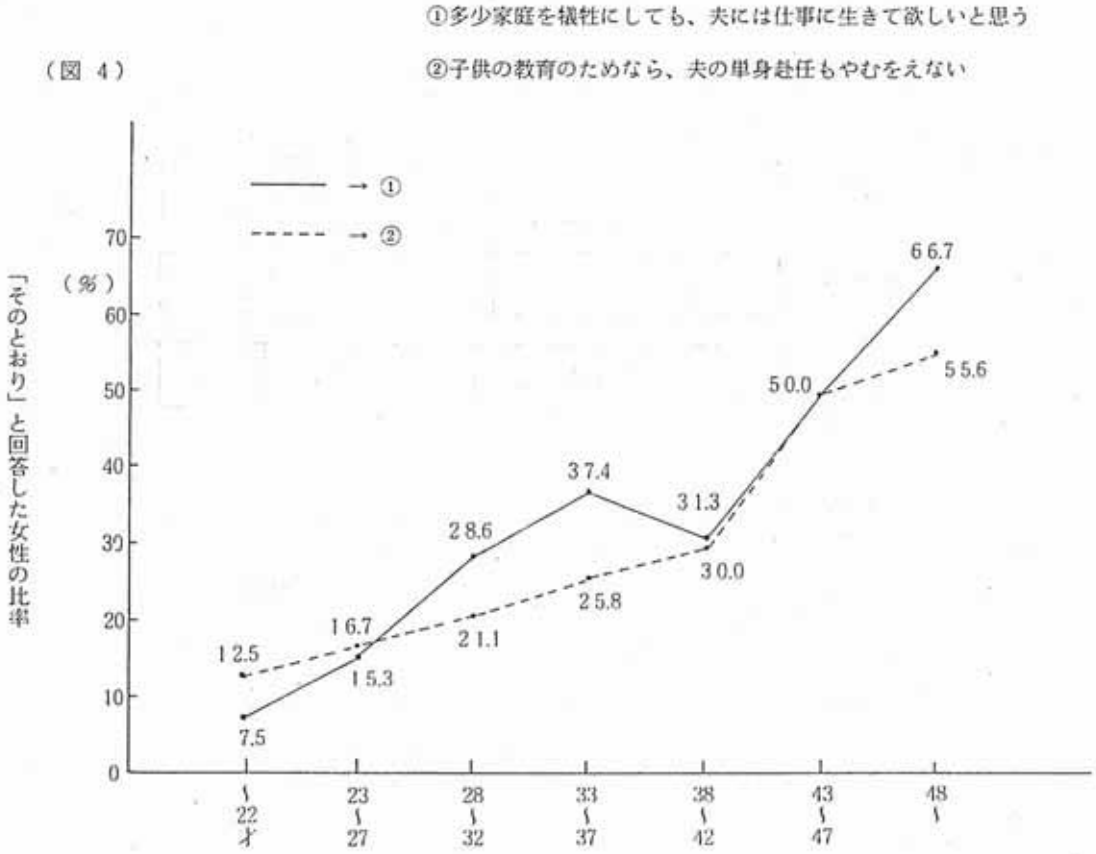
年と共に〝夫離れ〟する妻たち

「多少家庭を犠牲にしても、夫には仕事に生きて欲しいと思う」「子供の教育のためなら、夫の単身赴任もやむをえない」という両意見への同意率を、年令階層別に、≪子供をもってから≫というステージで見たのが（図４）である。

これによると、両方共、年令が高くなるに従い同意率が高くなる傾向があり、夫婦の愛情問題とは別に、夫が、仕事や子供の教育問題などの理由で家庭から遠去るのはやむをえないという考えが強まる。それは、逆の面からいえば妻の〝夫離れ〟をも意味しているといえる。

蛇足ながら、こうして年と共に〝家庭〟から遠のいた夫が、定年になって突然に、〝夫離れ〟した妻の身近にうろうろするのは確かにうっとうしく、「粗大ゴミ」と呼びたくなるのも無理からぬことであろう。

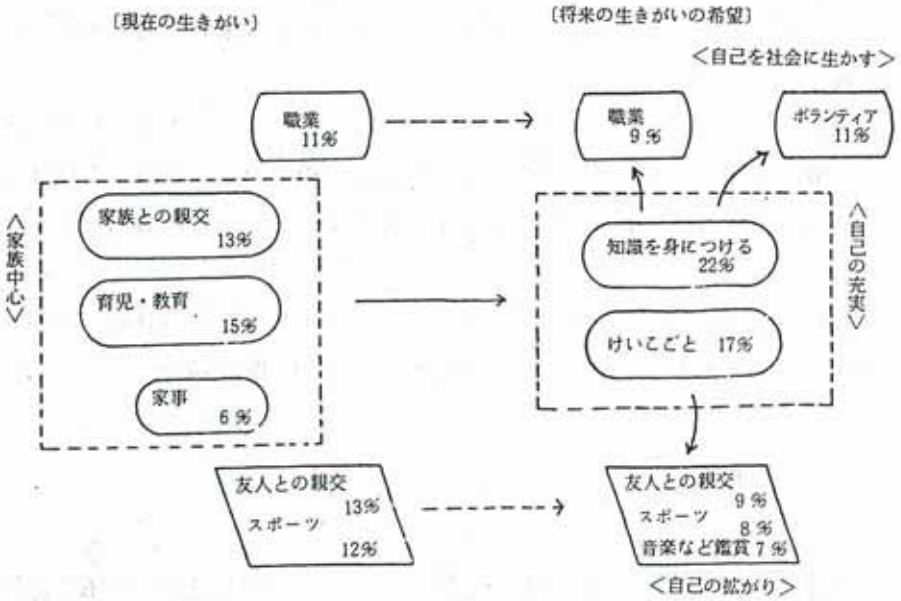
（図 4）



"家族中心の生きがい" から "自己中心の生きがい" へ

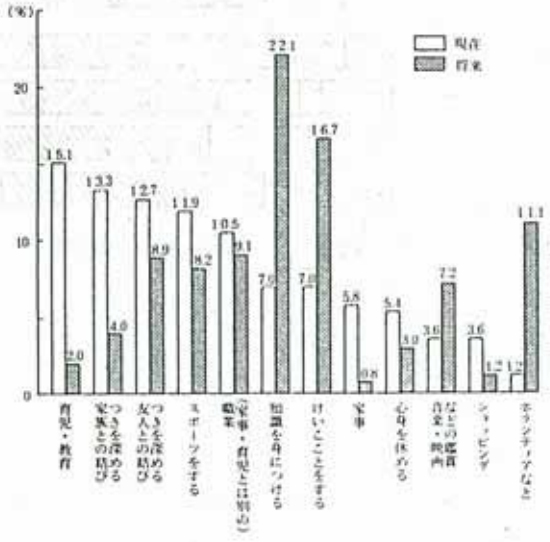
女性たちが描く現在の生きがいと将来の生きがいを比較（図５－１）すると、現在は「家族中心の場で生きがいを感じている」のに対し、将来は「自己中心の場に生きがいを求めていこうとしている」ことがわかる。
これを図式化すると次のようになる。

現在と将来の生きがいの構造変化

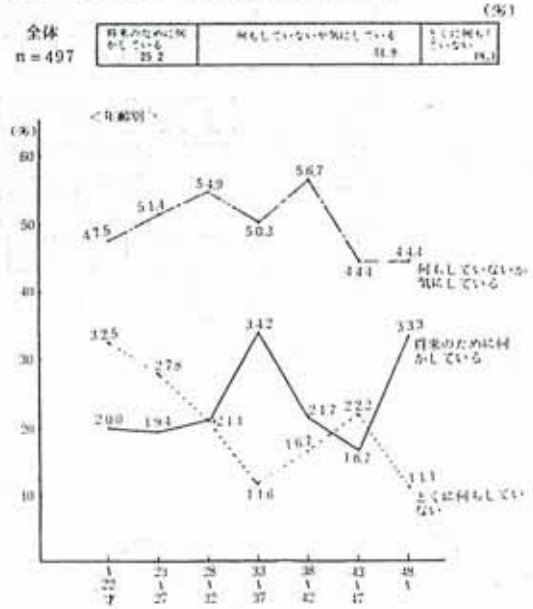


一方、こうした将来の生きがいのための準備（図５－２）はどうであろうか。結局は、多くの人が気にはしながらも何もしていないというのが実状である。ただ、そういう実状にありながらも、33～37才（団塊の世代）の年令層では、「何かしている人」の比率が他より高くなっていて（48才以上も同じ）、これが今後の団塊の世代のライフスタイルにかかわってくるとも考えられる。

（図５－１）現在、将来の生きがい



（図５－２）将来の生きがいのための準備



人並み程度に出世して、平穏な家庭生活を送る――夫の将来像

「多少家庭を犠牲にしても、夫には仕事に生きて欲しいと思う」という人の割合が年令が高くなる程、増加することは、既に指摘した。

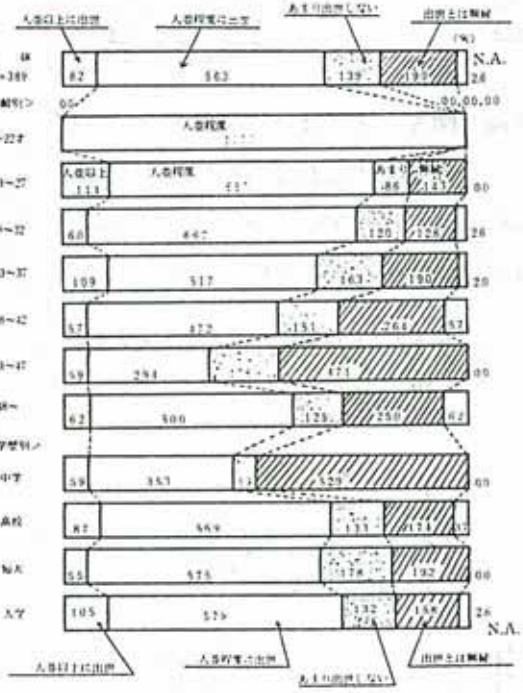
これに対し、若干矛盾するような感じではあるが、将来の夫の出世（図６－１）については、全体の半数以上が「人並程度に出世」としているが、年令が高くなる程、それが減少し、出世を期待しなくなる。特に、その理由として、夫が「出世と無縁」だというのが増加する。

そして、（図６－２）の通り、夫は将来、「平凡で平穏な家庭生活」を送るだろうとする人が過半数を占めている。

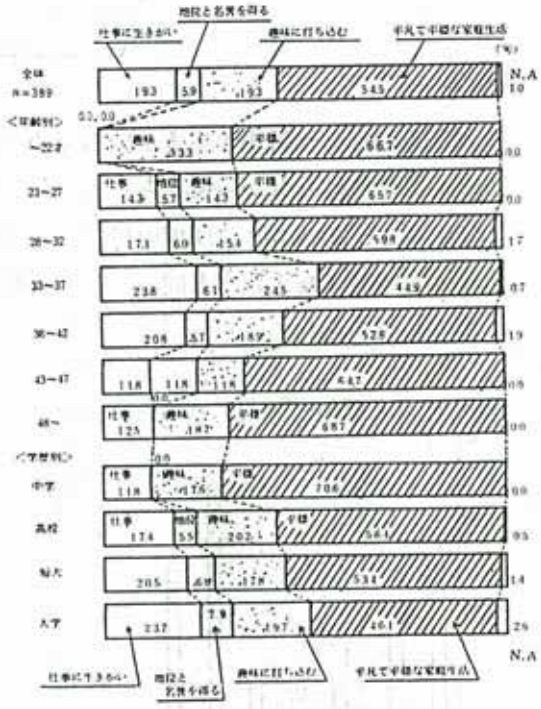
年令階層別に見ると、団塊の世代（33～37才）の女性たちは、夫が「人並み以上に出世」し、将来「仕事に生きがいを見出す」とする人の割合が相対的に大きい。これは、この年代の夫たちが社会の第一線で活躍しており、未来への希望を持つと共に最も充実した時期を生きているからであろう。

なお、学歴別に見ると、高学歴女性の方が、夫の出世に対する見通しが開けているし、仕事に生きがいを見出すとか地位と名誉を得るという想定度が高い。

（図６－１）夫の出世



（図６－２）夫の将来

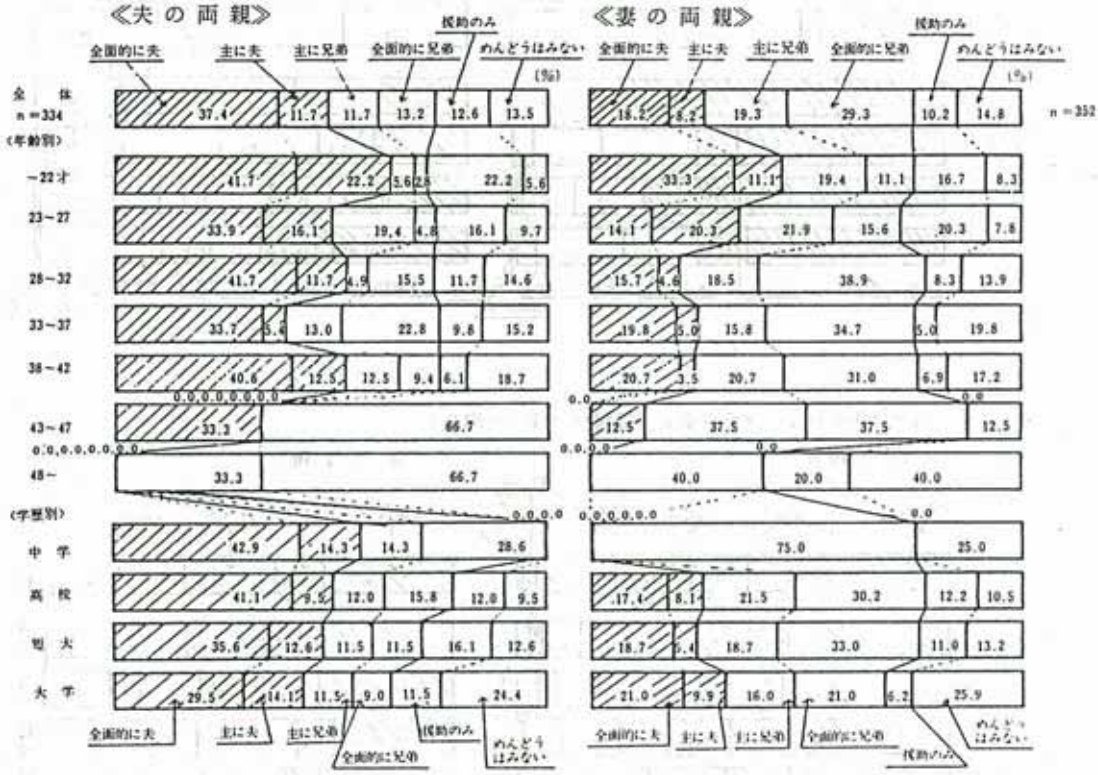


高学歴女性の夫ほど妻側の親の老後をみる

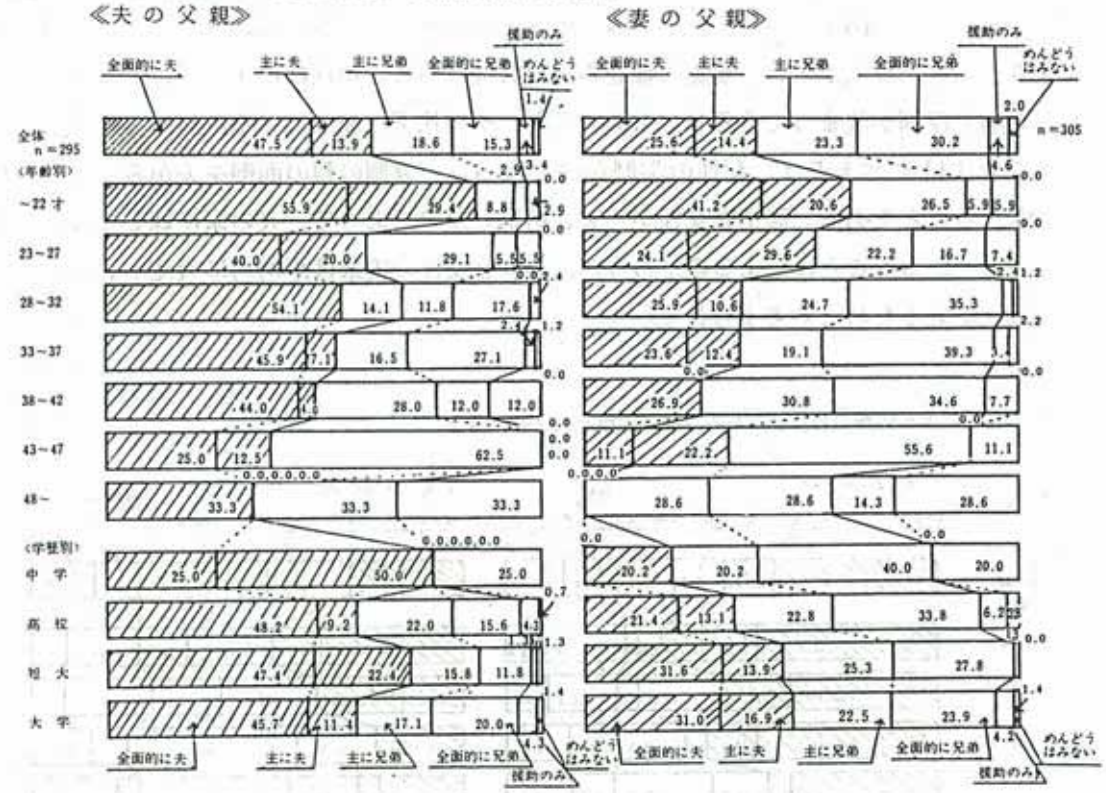
（図７－１）、（図７－２）、（図７－３）のいずれのケースでも、若い人ほど「夫が親の面倒をみる」という人が多い。現実に親をみなければならない年代に達すると、親族の中での夫の立場や役割が決まってくるせいもあってか、その比率は減ってくる。

ここで注目すべき点は、女性の学歴が高くなるほど妻側の親の面倒を夫がみるという割合がふえることである。高学歴女性が「夫と結婚したのであって、夫の家に嫁したのではないと考えている」ことにもよるのだろうが、高学歴女性の実家は平均的に資産が豊かでそれへの依存があるためとも考えられる。

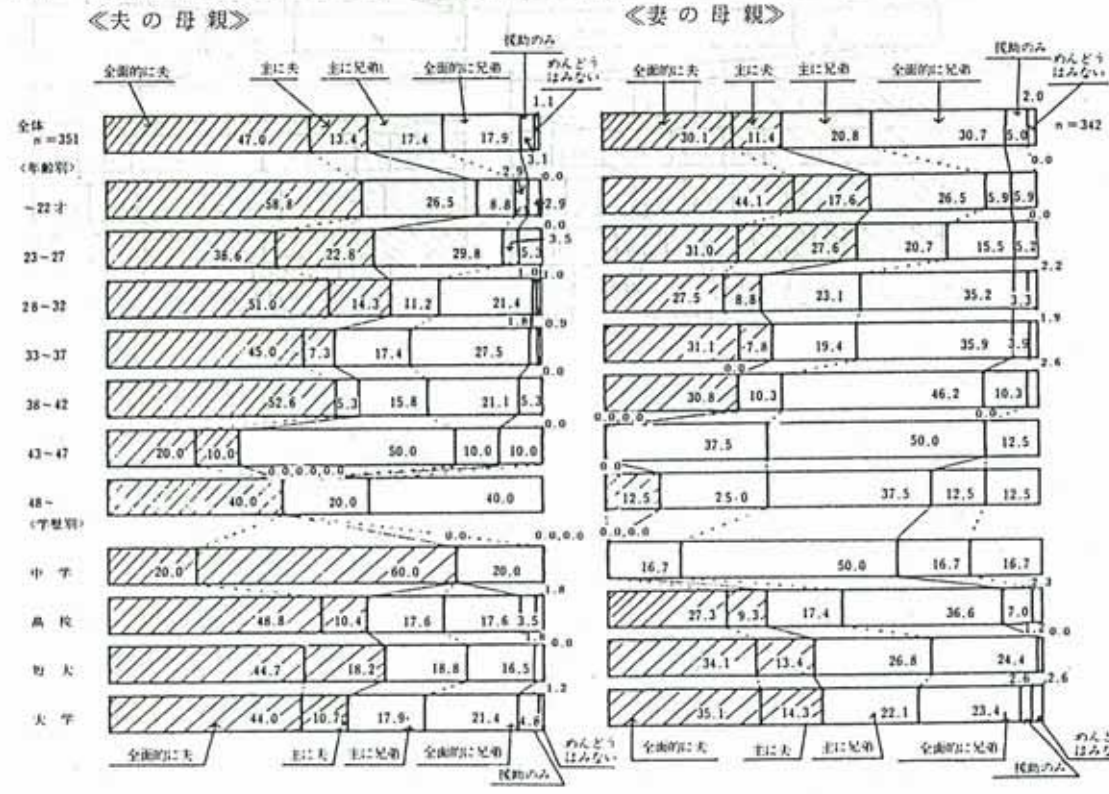
（図７－１）誰が両親のめんどうをみるか（両親とも存命の場合）



（図７－２）誰が父親のめんどうをみるか（父親だけ残った場合）



（図７－３）誰が母親のめんどうをみるか（母親だけ残った場合）



年上世代より年下世代の方が話が通じにくい

「話の通じる世代」、「話の通じない世代」というのは、自分の年令を中心にして、年上、年下、それぞれ何才ぐらいのところなのか。

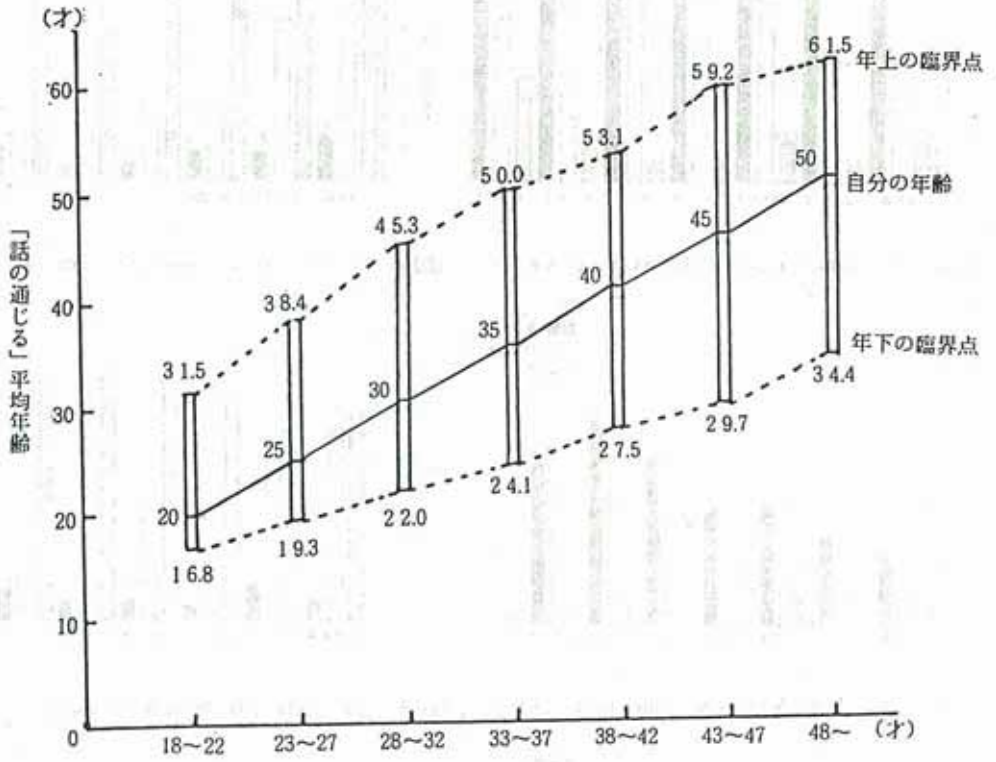
それは（図８）の通りであるが、これによると

- 自分より年上世代については、11～15才の年令差ならば「話が通じる」と考えており、各年令層共、余り差はない。
- 自分より年下世代については、各年令層でかなりの違いがあり、若年層での年令幅は大変小さい。たとえば、18～22才では、僅か３～４才年下の高校生とさえ「話が通じない」ことになる。

が指摘できる。

一般に年上世代より年下世代の方が自分たちと異った価値観を持っているという認識が強く、その意味では、年下世代への目の方が厳しいともいえる。

（図 8）　「話の通じる」年齢の範囲



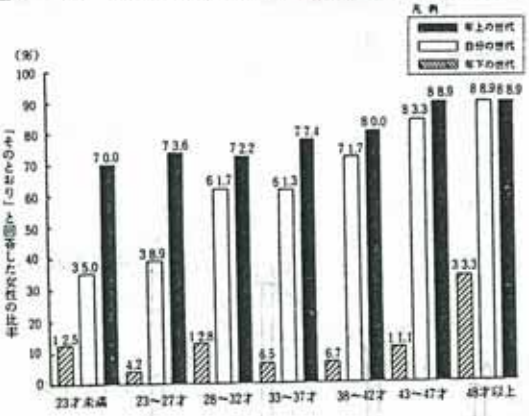
礼儀、しつけ、辛抱強さでは年下世代はダメ世代

前項で、年上世代より年下世代の方が話が通じにくいとし、それはつまり、年下世代への目が厳しいことだと記した。

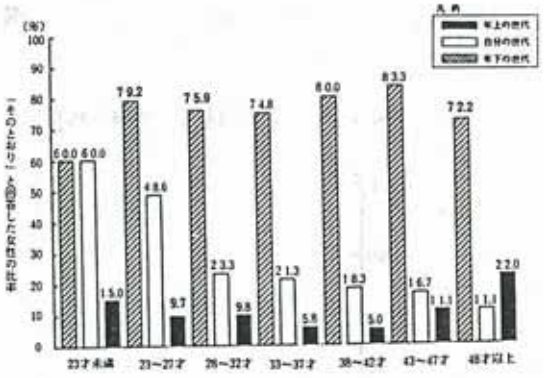
これを裏書きするように、「目上に対する礼儀（図９－１）」、「子供に対するしつけ（図９－２）」、「辛抱強さ（図９－３）」を見ると、明らかに年下世代は至らない世代だとしている。もっとも、自分たちの世代も年上世代にはかなわないという自覚があり、年上世代を高く評価している。

一方、「恋愛や遊びと結婚をわり切る（図９－４）」、「夫婦が手をつないで歩く（図９－５）」、「服装や化粧への関心の強さ（図９－６）」などでは、当然のことながら進んでいる年下世代像と遅れている年上世代像が浮び上る。

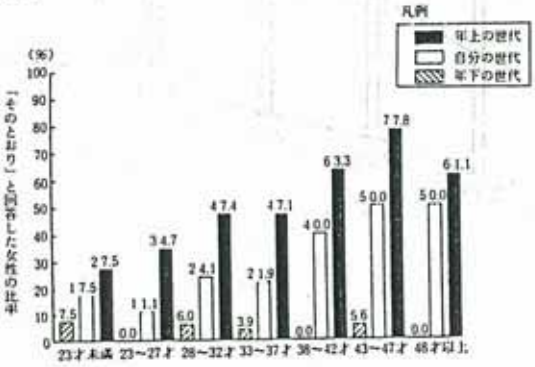
（図９－１）　目上，年上に対しては，礼儀をわきまえている。（年齢別）



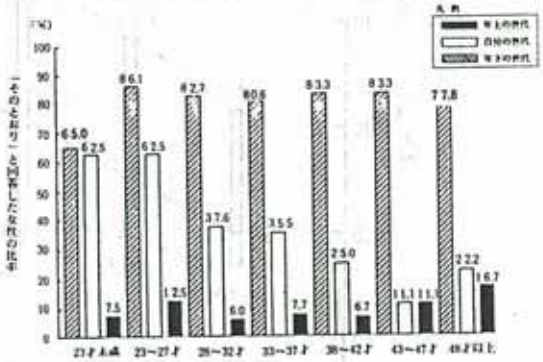
（図９－４）　恋愛や遊びと結婚を，かなりわり切って考えることができる。（年齢別）



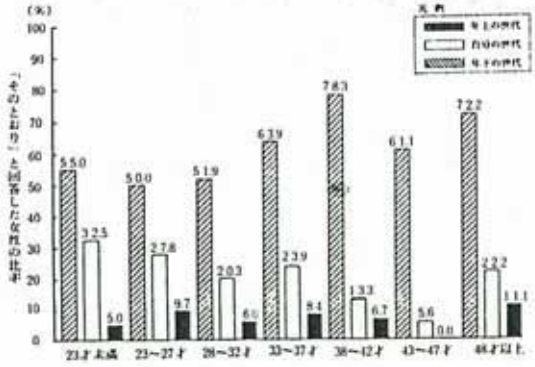
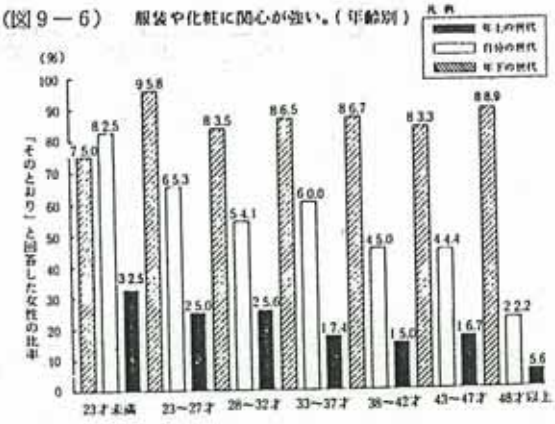
（図９－２）　子供に対するしつけが行き届いている（年齢別）



（図９－５）　夫婦で手をつないで街中を歩くことに抵抗を感じない。（年齢別）



（図９－３）　何かをやろうとしても，すぐ音を上げる。（年齢別）



（図９－６）　服装や化粧に関心が強い。（年齢別）